こどもを主体とする統合的医療保育はいかに形成されるのか

―大阪旭こども病院における多職種の専門性と実践の統合―

How Does Integrated Child-Centered Medical and Childcare Practice Develop? : Integration of Professional Expertise and Practice at Osaka Asahi Children's Hospital

西脇二葉

NISHIWAKI　FUTABA

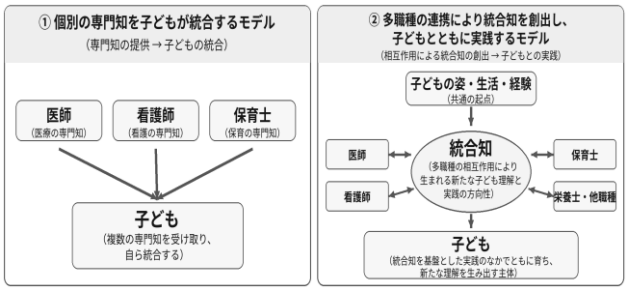
（こども教育宝仙大学）

Hosen College of Childhood Education

Key words: 医療保育、こども主体、統合知

目的

医療保育における多職種連携については、保育士の専門性の理解や職種間の情報共有・協働に関する研究が蓄積されてきた。しかし、各専門職がそれぞれの専門知識に基づいてこどもに働きかけるだけでは、こどもを主体とする統合的医療保育が成立するとは限らない。重要なのは、こどもの具体的な姿や生活を起点として、異なる専門職の認識や判断が相互に変容し、新たなこども理解と実践を生み出すことである。本研究では、これを「統合知の創出」という視点から捉え、大阪旭こども病院における医師を起点とした理念形成と多職種連携の実践例を通して、こどもを主体とする統合的医療保育の形成過程を検討する。



＜図　専門知の統合の 2 つのモデル＞

方法

大阪旭こども病院の現理事長・木野稔医師への継続的な聞き取りを、複線径路等至性アプローチ（TEA）に基づき、ライフラインチャートおよび複線径路等至性モデリング（TEM）を用いて分析した。さらに、保育士 1 名への聞き取りと、病棟保育・病児保育を経験した保育士 12 名への記述式質問紙調査を実施し、多職種連携に関する記述を KH Coder で分析した。これらの資料を照合し、医師の理念形成と現在の実践における専門職間の相互作用を検討した。

結果

木野医師の理念形成過程は、基盤形成、転換・構築、発展・拡大、成熟・継承の 4 期に整理された。病院の建て替えを契機とする医療のあり方の再検討は、こどもの遊び・生活・成長を含む医療観の形成と、多職種・地域との「横の連携」へと展開した。現在の実践では、保育士が捉えたこどもの遊びや生活の姿が医師の診療判断に活用され、保育士の専門的判断が求められていた。また、保育士 12 名の記述には、「保育」「看護」「医師」「こども」「情報」「共有」等の語のつながりが認められ、こどもの状態をめぐる職種間の情報共有と相互作用が示された。

考察

大阪旭こども病院の実践は、多職種連携を専門知識の集積や役割分担としてのみ捉えることの限界を示唆している。こどもの具体的な姿をめぐって、異なる専門知が相互に関わり、新たなこども理解を生み出す契機となり得る。保育士が編集を担い、医師・看護師・栄養士等が執筆する『大阪旭こども病院 院外報―みんなで育てよう―』の発行は、異なる専門職の知がこどもの育ちを共通の課題として結び付く、統合知の創出を象徴する実践と位置づけられる。この院外報は、木野の「保育と医療の融合」という理念が、多職種の共同実践を通して具体化し、その成果として形成されたものと考えられる。

ただし、現段階では専門職相互の認識の変容を十分に実証したとはいえない。今後は参与観察と他職種への聞き取りに加え、院外報の内容や編集過程を分析することで、統合的医療保育を支えるものが単なる連携システムではなく、こどもを一人の人間として理解しようとする関係の形成にあるのかを検討する。

参考文献

名須川知子・西脇二葉・木野稔（2025）「わが国における小児医療と保育の関係―史的変遷の考察から―」『大阪総合保育大学児童保育論集』5，29-40.

石井悠・土屋昭子・高橋翠（2023）「小児専門病院における病棟保育士と医師との協働」『小児保健研究』82(6), 484-497.

倫理的配慮：大学学術研究倫理審査委員会承認（26-0001）。